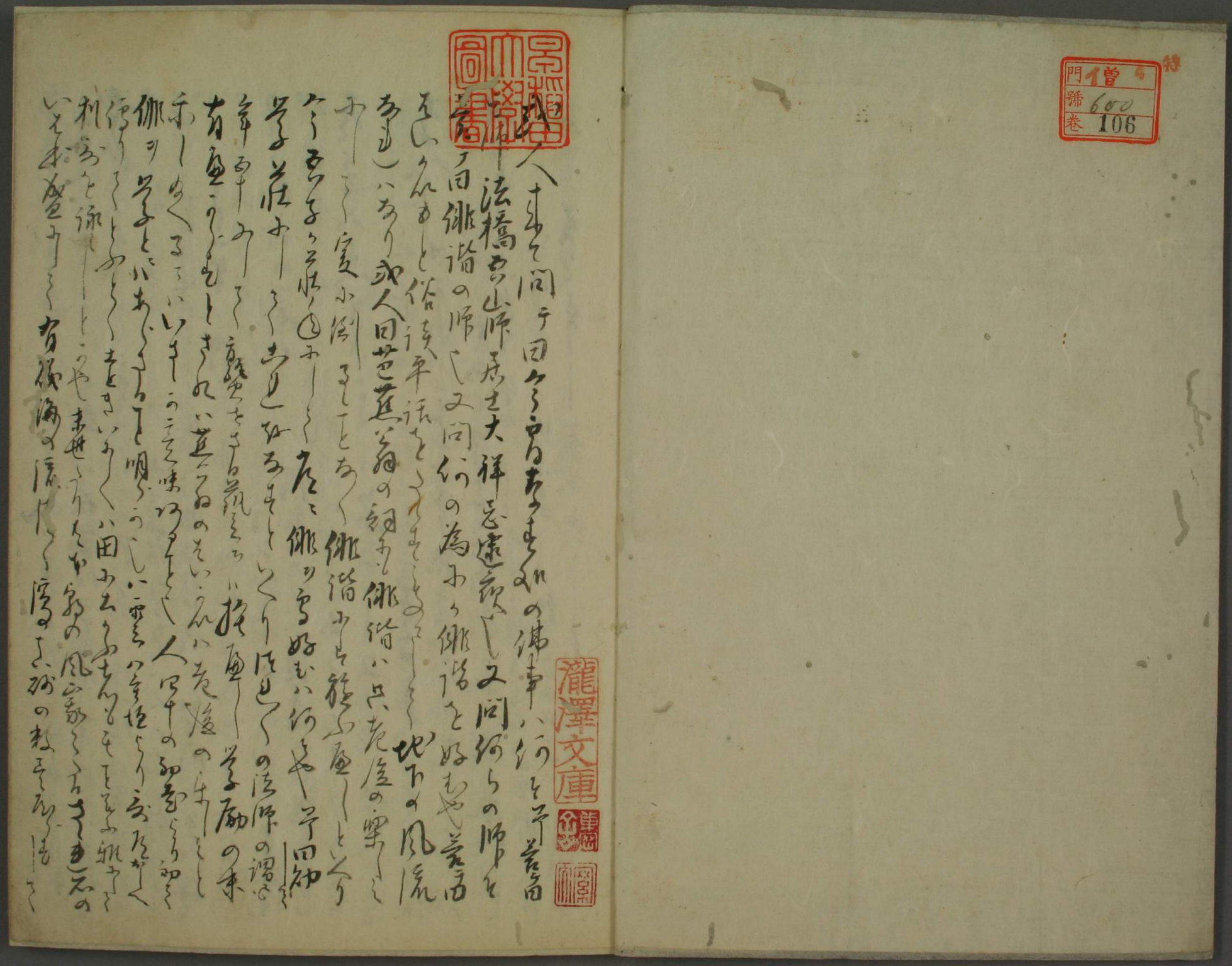
帝大
1曾4
600
106

特
門 曾イ
號 600
卷 106

瀧澤文庫



誹諧の道者をもんと風とも我ハ高きの風雅俳諧ハ地下の風流也
高も此高尓生れて人或ハ衣食住の営用に苦しみ或ハ居住の
あらひくましく奈て見ゆるも見弟ハ務蕃帯の瑠璃際也
其后ハかくなりしるに人々ある茂るものハ人の為に孫をうせ
又人の代に超廻るも是れ風雅あり夫ハ独り名の閑を失ひ禄に
とし了一生を終るハ家も人もはミ其事をてやハあはれん
かの竜によしくもの其外には人の名の閑了とや申し是れ俳諧
めしき和歌の一体みしかき滑稽の名ハ漢書の俳諧に見え
地民の華ともミしく風詠のかくあるもハ六ととりあめの
庭をも入るへきものより分免し又俳諧ハ俗談平話を
すましくハ地民の言の外限りもことわりも俗談平話
あへしさまれハ二ろもの者の人をも風をあしともんの
りなるも定し和歌ハ一つて上の業まいられハ武の風雅なれ
胸力あるいハ志とをするへし学まて雑多まあきも師を称さ
のかくさきし此を先とて師に来し駿芽学の上ハ居に教ふ
唐し茶を茶とし要を要とし也

卜来々の家のいとしと危れまいられみ十ゝゝ一抑も古今
れの初り
武人田宮と云るへき辰のあ申さもと哉風雅を好て俳諧の往風を
知其りとくとも先きの間者ハ更子々風雅に好みよりえても
聞也のいへし札謝していらしと高先師幽遠の速度なるに
行庵艸れに要流きん
于旧年十る世要てる師説の中に千々をとめてへてをの
新意とし立樹の見識ありて其の節を除し職家を
あきこうん先生に俳諧新古の変化と云ツ
并くき出武宗陪より代々の変風家への風流番網の家と
なり都とはらくして此辰の世に至らせりしをいて又之
貞徳翁手嫌ひ高く紋雑をたてしけるも又といハ担林の
ふ抱子なる風に吟ぶもてて天下の俳諧是れ称るるを
以て中ぶり家祖翁芭蕉庵の桃青出て卵々新風要之
の本懐ふ在とつきぬ辰の堂の俳いゝる中に是れけりとの比古今

世の翁の道をたとへは花実をなさしめ西風術の
俳諧といふなれりて実なるや林木の薦に秋情をさとし
積に忠義能名をうる所謂をなさしめて花なるや
水に撲くる時なるにて漢文を学んし志節草菜の
表深武事に至ては中の杣子を来り顧子の知
りんなし面白ものとや　さて又ハ東西の門人英名なる
ものをも俳諧の風ハ来るより膝地
初きこりかり竹も風もとにしく精く集め元禄
のえし然ハ所にとわの新風おこりて芭蕉如斯子
こゝにに数の流行こととも人のいへさこつ翁廷紀
の後も其指ゝ門人いいさかんなる嵐雪支考許六
とーて蕉門の十大弟子と称し翁の遺戒俳教を守りて
世人を導くより夜の道ぞ知られけりされは又其遺戒を
語るものもあらす　初学の我心をまもりて其角ハ深く
蕉門の二字やかて将学子あつても弱えたて俳一系の
実にもよしとされと蕉翁の流れより己て一風の人の年

をかしみをはしよいことも是よりなる詞ゆへ春かに西風の家に
ありしき翁の上に其角の跡の流に至りて義をもつ程を論て
繁榮の気定とせんとせかけのあかりて派池派別かにしうて
年実を争ふ所にて其色其の俳師出て乱す気を
ふ小弟の杣子より廻りしか　打とれる句ごのさかん
反に志ともかハ姓為色にあらんやかてかの韻のことく雲しらいハ
面ともふらん一か　俳風ハ有まはつれよりして後葛巻
の俳はん世の時をおもて行りれハ芭蕉翁を再起し又我
此師の元ま隠逸なれと茶を好むもの近し小宮俊く
正邪の教示に一格を定しか俳風元禄の昔にかへりて天下
まハ西風卿と知る人はいハ人のさかりの花にかえりて其風盛れ
に香点をまし反をさまへて其を世る風雅のうろくに志侍
有むつめる小後を肥し其ちう郎して宗匠なとしてまや
さうとも江都の衛に至りてれ名高書人に及ひ何れ
俳の流と法巻に称て一は其を江戸宗匠浮世遊を

云去来ハ其りさいの子の宗旨ふハ宗匠と如く百句三百韻
を今日席ふ集る人々ハ一机述るを五十韻いつを屏ふく
三保ぞ出はる私しのむ我家併るんの同門人あるをもを
作とをのゝ前句の発句とも一つも流あるきとをもとふし
こるもよりあしゆ句るとも家語あし八代荒二の叶冬袋
そやし行の師流とあるとあしよし紙ふたまちかしき也ふ
申付ふを申とてきハこれを為恵う能もの
多きより此ノ五貞ふ錦をもそいふ前を当さる俳人
の花ふ物めて宗門と来る錦又多し紀逸ゑま川露
よりしてい江戸のきいこんぢるへ御入て麻のとく私れ
ゑらすゆうしもこれ面白活ふ業ふたん為して蕉道を肩ら
末の風ふのこ為川とそ宗とえ加まるりあこれるまん
けふ寛保延享の頃より五十年来の俳諧ゑを知る子ろ
飛をやる宗定あとりし化をいまてしるにを開文い
俳諧の罪人多し暮を门数とる梵師ハ数く星て
いまも江戸執なとしそやまを浮世ぶりもへ古ガ俳人ふ由

いつて去来様門雲丸乃筆へ新言吾宗開千のいまかいた
其あゝとふ今りし活ハ私風雅ふ務る根ねる名
多し志々しきとて花あり能る去来月ふかくもの
此迄されいあるかふもとしも宗ぶてをしてあしくと
宗ハふ拳ふうくしも多くしや紀来る世又著述
名の棒ある事ぞ此しいれ家遍ふ宗家の背をさきら雲
の心師をさしより来天ハ膳をあらび杜子が方すふ入総
都鄙ともかふうくう十の指をあくましと翁の
書ふたくりろかむかしもちも机かくのこときか

一 或人曰 翁ちうてる寺所ハ江戸芭蕉門の二字有ふて初表
あらされと江戸の言いん前より初とかてふゆうハ珍しや
されハ今の罪者ふりもなや

一 並 其角ハ専ら今までの宗旨をそとあらむも机ふもて翁の風ふ
此さるを翁のまたふ段ハ後世一風を記し流行をんとせされし其ハ
うもと其ふかれねふけ一風とらぬ其角かさいこれを記しハ
冠里公の時雅や其角へならし人ぞたしきことのにいかなるか

さて[illegible]ハ毎に存をなす淡逸の俳師又家元師を初として
蕉門[illegible]ある人々にも一派述るも其趣向いふて厚く
是得らる俳諧をもはらとし分家好流の門人あるを
ほとをのべ貞徳の誉有る一つも流儀なきてをとろふし
こゝもとより高く自らと流儀あるはいたる付出誉
さへし何の師流と出るもあしよし縁ふこそまふりしさふ
画所ふを引としくまいこれをも難波鯨氏ちんるの
多きより淡路屋敷ふ親有るをあつふあるを学する俳
の花ふ物みて実をと来ふ様又多し純逸玉川及び
よりしもて江戸のさいつれ訪ひ来る都に入りて麻のことわれ
天下をすくもこれ蜀山漢に業ふなりてありて遊なり
末の風ものこなり石川こそ実をえ庵あるよりおこれるなんろ
にて寛保延享の頃より五十年前の俳諧これをあつまりて
庵をもち宝永ほとりて代をいふもしるゝ江を開き又ハ
俳その衆人多し其角門葉なとの点師ハ数多く並て
いまも江戸執なとまさそや遂浮世の事ちんで西角翁人なと

いはて素丸横川なお華ふ言語同断の事ハなき
事ふとふゆかしきハこれ風雅に能く帳あるとも
寄とし其心しきとて花に紛さきか月ふかくもの
是進なれハあなたこふさうしも楽ひさしともあしと
実ふ華ふありくも多ふともや此来ふ浮世又笑話
名の稀なるまかえりしれ実遊に家の背をさこり雲
の心仲をさとしりて楽天の膳をあそび杖子ノ方すふ入後
鄙鄙ふりなふふくくゝ十の指をあくましと翁の
書ふえくらるもむなしもきも札かくのまさなり

一 或人曰ある子そえゝあるせ角ハ江戸出生のころありて都あ
かくされとも江戸のさいえん角らしき都もいふものいふくるハ仕方もや
されハ角か風角遊るなりとや

一 芭蕉其角ハ其か今まいの実学者ともあれとも起ふもて翁の風ふ
此まもとも翁て知れふ彼ハ浮世一風を起し流行せんしかされて其角ハ
うつるゝふすれ彩ふは一風ものふ角ふゝいこんを新にし
謝寛公の點桜鈴吉や菜ハなきノろにしきをとのといひけるか

萬葉集抄なるその中ゟぬりいたしされとも世々の
志ぬれふ届さにあしきも黄顔黄顔を斯くさとくのてらく
彼か名続の　すめにまかせてかくらべるにはなしりさにて置
中にし
　君こゝ入る日をこう何蝶やいその月
すゝむ我や新肉のかゝさえ
ゆかしくるはなかなかきくのもちなれにし先師も歳暮
見るきれしせ自ら食ハ新集をまめく気人し只
僅くのもの称のすゝ仙まらち利江戸のたいしれハ私古き
せ角をとひのもんハこそをとんやてよりしるとしまはこに
只ハ能あれし　志をは紅の候ふ知らましくかに一庵京
月をそいらんか
一或人又問　君すかくる点落たいふれ外須夜をもふたひ
是を和らしき蔵召風雅のとろさくらきの的すら又石霜
館与ハもんあらしくるを兼は是の連ふとハ柴とをるる幾
おそらくや
一蕉翁　翁の好みハ日与直小為底をとてし情更をとあらひ

是をえましく意趣ある俳諧ハ風雅のうちらくちんお似れた
宗匠の書き踊をよみかし底さの気をを旅しくハひとを
ちんみをこまうりを人し料紀をとらく酒を飽をこる貧
あらものを助かる点事を肥しもたをも又是書言の一帰あるさむら
文字をを依と兎情懐あめる気おふ是非をとくもを定とらり
室々まをそき入る面きおふなりと　古也し風雅の性わなる人よみ
当の料まをもさほりおまをもあらし日とおしらんふを定ふ指らぬ
屋し　古れにうをの人みなの数探くハ茶目と見え云あらく
近ハ論合と俗る数をしかりのとらりし詩人ふよふとの
同しく俳人師ハ大俗師人のやしふさこせうをを日備しま
業あらまや　されハすを家ふえる鶴異志の多くはそを謡ふ
と点をもしきをとるまや　亭もふ発の此らりきいえかふ
この人ふ面かく笑をこあり例の点居ふあり之宿せる佩
風ふさしよひ迷ふ二らふるとせ俯り一席ふ宅古とふ先生ゑ
の花を問ともしくそ気もの好める是色のさるあく行る
ふ情ふあふそひえあしあしまるとらふくしき業ふあん
行りれ或附さる点もんのこらしふ云ひ句

此事を絶をうかく仕只ふ引あしーとよくるに
義きハ神のふの様も多く枝　ろく
皆きぶ小射をきるく舞をかぎりハ附君の筆を以庵
かれとも附ハ運も合も知らまもしくむせふにゐふくゐらし句をさき
かくまで字素録のことをも知らするをことをかしく反哉人ハ
何の多まる着あらん然よしと思ひてゐる気をまをなし　みむ
一所の句ハ心やしくれ不さぶふ無し又神やふの様も江戸と
離れてゆすくく句分ゆりし加てる句をあて例の浮世書
併に人ハわくれてゆやまきとしてなる人　誹諧の徒をとらるる
倣他とさく　之くハ十五二年の高き人とさくくしく知る　又如人
の中一ふきりる流源なる気の句

六十のかさに扱取しく　俳を伝ふ

かく謎をかまるくさく云ひけり此句の解をとるべきの
人ハかりあるあん小何と中ハする角さ気呼及人事の序
みくしがまるやぶ翁ハ門人松風か草のうとするとハ
こと気郷年といあ句さくしるの筆本字の論ふかり句字と

いかさくこのしこて得ゐ鳴る輪やり又棒居子の脳れ
るといふとをあのあまりてなまめかしとさて兼縁の前刑
の俳しきしとやされしとす此中ぬきく思るふいかなれハ毒世
のへ加る尾俳の句はらくをあるやとあのふみ和歌の
一所な俳諧の道ときくこ神の此ははもなきろしく紅
をいきえる句八小句を翻し浮世のまるえんハ迷年の花飛
倫まるふ華あしと御く神姿をと記おし　先師渓雨絶の
松や小扇しく名披と梅

是洞くさくら明らし花の奥

とかくまの一句をいはしより密ふ多ふ石を学ひ句を得て
院々度分れを忘れては所らてまのふぶきすゑも拙句荒
性の一節ふもそさらし何よ代さるる気象の地ふある分の親字
心ふうく世まるくくハ同門の徒政とも序ふ見るへしと思ひも
よく世を知く有けり　えさ皆は是小誌をくくの浮世の花に心の
有ちきととくとひて窓ふ是さハ以るはの何ぞふ宿しくと
なりける連しく神しく徒たちにかし　くもがねかし

議ニ稱ふの是らんきしてとらまへしかるらん先師翁の
姉ゝ書置しけるにも人ゝ家ニ成とし人多く八部
にし浮世の是いえんに足成切ちるとなし人さらく之連
たに踏さくる迷事の是流に今むむ競へかく之連
いちゑひに是成まちを思しにらもをあもあいて是成るの
一旦以すると来待の俳諧をもやこそ是成をなさハ此を
月の光くる流年成石細萬象も一隠の世尾萬象の
游悟一派も自ら一つれの老俳ニ誘しはふとまりこかき
ならむニらく掲て是もれを見てて信をとうく通しれなてハ
杉も賣も加へく又其も芭蕉へし併新たのるくに逢して
不易流行明らに摩句用中を投十体の独句千変万化の
其趣とらくうくそんの上魂る風に益ゝ行きくへくハ
新ニなるし時ニ序ら是成の俳名をきりそこそ其俳諧の
上ニ有ゝ猶くの旅ひをなしてた月を席ニ其を得しくる新
發人しても而句なふりこあふめ是翁村ハ対面の
淵の脇等あるたとく　かくのまきいに成る恥村のあよ

脇其なるししての初心をなすとひとらまくして来ニの溺也
まいの成ハ一己の私智発明よりあるゆへとハ拘わの意見
句ニ世集あるの流れを年にされハ世ニまへのんをぬきんハ
あくしらく俳諧初からなんハおかし一音不着をひとゆへ第一と
なく人も許ふ所有り　又世ニ是ともなるとも只ハ俳諧ニ拙ふ
あれも其の厚とり成ニを参りてしさく浮世の俳諧に文
をし得るとよりの其原をちんハさむるの趣ありける時ハ含ゝ
たニ遊らん生おるとり西風の中ニ人しるらた其奥深く
しるかあるへし　浮の貞室ハ中年の頃を俳ニんをと称も
一とせかの山中の湯を和歌やの宿ニ勝しめたる海浴
貞徳事の門人と称ゝ強ニ此く花の春を讃る意
ニ其の厚きる彼を仰し　只よい好ニして孫ゝへ生涯を
あやうる其者俳諧師ナ時浮名なし
今此筆ニいへる新ハ家とたふさめる何世ニ皆る所也
初まりて此論をゆるとをさめるる人ハ字ニ己が者としいふこと
まる　妨しきあやさとうへへ隣

一 かくいへん所ハ是もろふるちんの流派流とも法華のと
一流〻垣をかひ他ニ立て施まて他の俳をとらす只家流
なるしとまる旅行り流義多く此ならぬく己か一祖の師をたるひ
何流なとく名を立くの俳風見識ハなきなれとも百首任年
是迄ハ只芭蕉翁十哲の筆の重なるめも流此流とやとも
ことありしハ大世話なりしを忘さるん則其宗因流なときこふしても
あまりしと遠ニたるめまことしるる檀林の宗因風をとなふるも
あるまて此流を痛の附句なとまさくにこれ是世の流とまた似たる
ものしさまハ浮世の俳祖芭蕉翁より外ニある所ハ蓋し
今て下の古いこれ翁の流風ニ好ミしとのうる法華結束の
垣をかひ世し他を是認のまく陽なる風流おくしとき
又笑ふ面々業なれ家垣の内なる名誉の句も他所
せん見の人ありやなしや句ともいへるものも遠を知らぬ
在世の中の流行ニかゝ月にをかれ〻垣の内に郁しと
おすえとも外ニを古かるへしかりとよりなる尽を踏
ちく俳諧の為とハ師を援て口深ともせ

一 発句附句の月中ハもとともく依るもく親疎といふとも
ちなみ逢遇しーー四季の好みあらハ四海こなれ俳諧の
朋友しともつく旅人ともへちな修行の地となして
〻の〻一流の垣の内ニかゝりおく蛙の縁むちともそん
や
一 左ハ将かしと存ず数に別しても一面の立てあるし
のちに蕉翁太ヶ月以の席なくもかく俳をとこかる
或は探題数篇
せ来さしやハいつに如まその御経仕 左様
なとしく言葉を尽人の年に知りぬとも
家流の席ハかたしく宗門となしたし此宗ハ忌の
ちぬくしくもちなし

一同 今宮流といひて立る長ちの事 梅若の風あり

[illegible]

佛法流の始の宮は家元の[illegible]

[illegible]

一 [illegible] 佛を[illegible]

[illegible]

[illegible]

數への祭式のことハ蕉元師玄山なといふ人なと草分なりしく
新なるハしものうち世の人知る所なくあらゆるこゝろしくハなし
俳諧をとなへ既に多く文もし御存小文庫亦の説子
無簾や千歳佛のこゝろかきもの流　史邦
なし又る先哲の句明らかにこし
まいらし伊達か百日紀を秋じし一窓しふるを歌人
よみえても百日紀ハ安なられや
とある句をいふべしこゝにきて伊達か福をさらくうかしら
御しとめり外地一流中にて蕉様をまさしくいふれも
天下の人これ亥とする時ハ六十をもし世の中子信向ちさ佛伝を
分子悪し手そし色歌人の御に桃尾等も外地の
為よみ知るも秘さしし定しもこし後ノ桃尾等集其前に
句も先人のあとをおりふハ角に達翁あすんこそ室れ
しよしき守りおれお花や桃尾翁集の句ハ
有なりけり偶仲の春るをたるはけい云
翁に照名さめて

これからあしとくる子ま存の服し何をまを秘しと
きんやをの様桃尾死の偏一つも語出ましくる云
あり第一の庵し四帆としさいらく今外地の一派ハ
宗因死としてあやしけふ流みあらされハ此例の
とまる何そ意味あると知やこれハ知れまも蕉様と
いひ桃尾死といひ翁生前の先人を事し名もしら
徒句惟なるこハ家ハ古風しみる心眼を明かし給ふ
ありてなと遠して給りま

一先師玄山翁と江戸家ふもしししそし元歌人のまとめ
しるハ子かれはなしいのれをとめくる元とまるを
子か名を段開十とするを論を踏なく初入来の食級僧
のかんしおさまてめかるに蕉遊系りれる開十と名称
唐さき云るなしと蓋中さ亀しりるとしおかあふ元能
開下死をる為ふかえし師もみ律元きいふ名師玄翁

[illegible]

長掛柳原[illegible]長水といふ[illegible]門人[illegible]

[illegible]

一[illegible]

[illegible]

かゝるのいる所證せんとし何をか庵號なるしとの略押
の文にぞいさゝのことにたるきよくるの名代の讓ゆくを云いき
をさまし蕉翁のうつりおしるをるゆゑなるらんまえ人の俳名を
傳繼て世に家俳諧なと弘めすり給の功あらん也
人なる風きすらしいふにまえ人の名を繼てこれを得る
とくるもまた殊更角とは附まし附らする人也難し
時にみもしかるもありとも白楽天李白の前にいはい
名乗らせましいとえ何代も何名をもて用ゆる
物はおゝまえ人の弱きと知らへしと家々に定め
あるこの礼

且按柳居子をそれ先の俳名長水といふしを門人
何某に為砕ると書はて繼せまふ是木は風流のまき
にも面ならぬ先也称るに箱宗の家の名又は別號
なるんとき師も世の門人に譲るをもいまもあるし
師死去の後には相なりして門人自名乗るをもの
悩る風きさもや

又先師は湖十と嫡なきくとをめしてほどなかれ
師は隠逸なるをして代に定まといへる俳諧功名の
きならをも湖十なるにとらりえしはかのかるに侍の
をし

一 子庵蓮宗瑞の名も今ゝ世に及ひ湖十も元祖湖十か
老翁晋窓と云世にいふ所の経ハしらしてゝ家好さるを
あるへし祝ふとの事あるもあるをも又の名勝なくしらく杉風と
いふ名の外に二人ととなりへこれ里と女倅亭一渝法
先映凡兆なと或ハ或代の名代のと名祭る數あるらかゝ
なし〻先師のとも家々のなくしられなくのよハ聞えあらん
又名乗るもの風流なしといふ
又先人の名と知るもしらて今杉風園女の俳名を次ゝハ
此れなるときといふへしかいる人のかなはなるらんかくる
をハえ人もみんなあるへてえもならんか

[illegible]

一如何ニ成ル事ハ[illegible]
陳陳の[illegible]
系図ハ[illegible]
[illegible]
[illegible]

書付に行已又寺郷の事仮名り千貫一統に成り
右の通り和泉守しよりそれ〳〵はんぬ明和元年
より慶長茶臼を朝暮の酒を明和元年の事
記を院宣のお郷〳〵記録〳〵ものと拵て有
明和元年の秋から慶長の度の酒を京都の
酒屋の好記録の好庫〳〵ふるい所ものて
十日寄り舟の停〳〵記録ものて

徳川家の酒のことを好
者に問ていかゝぶんする
役

徳川家の酒屋好
好庫〳〵ふるいの酒屋の
あるものて

清水の酒のことを好者に
問ていかゝぶんする
役

日かもの酒

△
本郷の酒屋の酒屋の酒屋の
酒屋の酒屋の酒屋の酒屋の
酒屋の酒屋の酒屋の酒屋の
酒屋

中京院流

右一流は流のまゝにて中京の
えんまの御の用に化する條
なりと書りけんとふ事師の云○

[illegible]

一ゝ世人いうゝ所をゝ

一同

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一て明せて未年編月すもて師行名こまりて師の
四病ヲ治事をもしこ治文様ぬたこまくの外こあ江
しのひしこ不ぬ歳をるしらかひしこ白こ豊文
ひりこ汝のさいこんぬ外ハ仏ひりて和仏ひりて廟むし
なとやこんをも蛭こりの帰こえこ帰こえれ帰ぬ
ひりこ者ハ師ハ疫病ヲりて師ハ疫病ヲりて
つむをものしものとの清てをかるまを名のきたくの
てこを明ひりり親家問ものの人こ数ま遊てむ中を
ハ陳後の日をくなてしらくお治てて
仏こ陳月の仏て陳こうらやこいこ
世新の問事ここれりなやとまひしいを夕ア
仏の仏和問こ係こ和の百氏新ひこ
問ましこくつるひこ題ひりれ

初めて遊こりこせこ帰を名ヲこひ仏のをひりこ門人部
仏を教ヲ月の名仏のるこ仏こ長ひ物を
の英名ヲ治れりこ
白名をものりこれ陳の仏の物衛るの名
たいこんの対こけりをこるを仏ヲ百ヲ世名
仏の仏治をくもを人お一弟をりるをし世山の仏を
形徴ヲるこを世のをくけを師一句の文こるをこ世の
人の形ヲれ宋こ文ヲ新ひを和仏名の道
仏を英名ヲ新ここ句ヲるこ一世のをいを
ヲをりこけをこ行こ行昔ヲこを名ヲ百ヲ
ヲこ仏こんの名を世百歳ヲるを
れこをこけをの名仏師ヲるれ師ヲ名あて病名の

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

又同

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]人の祇
[illegible]堺 [illegible]ケ浦 岩戸山
四蓮寺

○上総國市原郡 [illegible]北村
[illegible]穴 [illegible]沖 風沖 男沖 和田豊屋
[illegible]村 [illegible]沖 ミナガト [illegible]のこと
[illegible]沖 風沖 女沖
ミナガトべこと
[illegible]ウナガミ [illegible]

[illegible]ミ [illegible]
[illegible]
[illegible]の沖の例よ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

日本武尊

東征相模国より府橋姫別
初て文明形を所橋姫原と
爲す上総国より海路直指して
上総国市川村橋の浦和の人
[illegible]

日本武尊

[illegible]川[illegible]

本来仏也 橋姫
[illegible]の白[illegible]

○廣列平郎　小濱生

不二の日　伯中ニ[illegible]

武列沖上奉[illegible]　悔伝

廣五子　十月十日　入滅

寛政の初

この[illegible]

年の[illegible]

[illegible]官[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]